



石北本線のタマネギ列車

会員 五反 章裕 (63 期)



「石北本線のタマネギ列車」。そんな列車があるのをご存知の方はおられるだろうか？

鉄道で旅をしていると、車窓に目を奪われる絶景路線というものがあるが、北海道の東の果てにもそのような路線がある。

それが、石北本線の常紋峠付近である。石北本線とは、本線とは名ばかりの単線非電化、それは結構なローカル線で、常紋峠とは、石北本線の生田原—金華間にある峠で、常呂町と紋別郡にまたがることからその名がついている。急峻な山々の合間を縫って敷かれたレールは、カーブの連続で、特に生田原の駅を出てから常紋峠のサミットに向かう道は、S字カーブの連続区間となり同線の中でも随一の難所、列車は自転車みたいなスピードで山を登って行く。そんな常紋峠は、秋になると山々が赤や黄色に色づく絶景の大パノラマが広がり、鉄道で旅する者はみなその光景に目を奪われる。

そんな石北本線には、タマネギ列車という風変わりな列車が走っている。タマネギ列車とは、北見産のタマネギを旭川まで運ぶ貨物列車の愛称で、北海道の旬の味覚を満載して、常紋の山々を越えていく。タマネギを満載した貨物はあまりに重く、機関車は一台では足りず、前には引く機関車（プル）を付け、後ろには押す機関車（プッシュ）を従え、常紋の山越えに挑む、全国でも唯一のプッシュプル運転が行われている列車だ。

旬の味覚をみんなの食卓に送ろうと、色づく常紋の山々を越えるタマネギ列車を撮ってみたい…、そんな思いをいつしか抱くようになった。

そんな中、「タマネギ列車廃止決定!」、そんな新聞記事が目飛び込んできた。もう猶予はない、ラストチャンス、昨年の10月、自身の信念に反して北斗星ではなく飛行機で渡道し、常紋の山に向かった。

撮影ポイントはS字カーブの連続区間である146キロポスト地点に決定。ただし同地点に行く道が地図にはない。

とにかく近くまで行って、あとは現地で道を探すか、藪かきだ。前日は生田原に唯一ある宿に宿泊し、翌日、

常紋の山にトライ。車のナビに存在する道はあっけなく終わり、途中から碎石の道になり、牧場をつぎつたりしながら進み、途中からは道らしき道もなくなった。道中（道がないから道中でもない気がするが）、鹿が突然飛び出してきて目があったりする中、突然目の前に現れたのは、何と“熊の糞!”。山の神々に祈りをささげ、さらに進む。すると、とうとう目の前には…、常紋の色づく山々が一望のうち、その合間を羊腸の線路が縫うように走る絵、自分が夢見ていた世界がそこには広がっていた。あとは主役の登場が早い、熊の登場が早いかだ（笑）。

10月とはいえ、山の気温は低く、ダウンを着ていても寒いくらいだ。熊が登場した時の撃退法をシミュレーションしながら山奥で待つこと1時間半、山の麓から「ゴウー—」という機関車のエンジン音が聞こえ始めた。

「来たー」、自分の中で緊張が走る。誰もいない山の中で、貨物列車を撮るために三脚を立てて待っている姿、端から見ると滑稽だが、自分自身は真剣そのものだ。

でも、音が聞こえ始めても、主役はなかなか現れない。改めてこの道は難所なのだなとつくづく思った。さらに待つこと十数分、「ゴゴウー—!」、大地を切り裂くような轟音と共に、とうとう赤い車体が目に入った。ド迫力。「キ、キ、キター—」、緊張の中、先頭の機関車を手前のカーブまで十分に引きつけて、シャッターを切る。「パシャ、パシャ、パシャ、…」、誰もいない山々にカメラの連射音だけがこだまする異様な光景。目の前に登場したのは、例えば突然の結婚報告をする前田敦子でも、新内閣の組閣を発表する安倍首相でもなく、単なるタマネギ列車なのに…。しかしながら、そんなことはお構いなしに、当の本人は、自分の世界の中で満足感に浸っていたのでした。

その時の作品が、表紙裏（リブラギャラリー）の写真。前（プル）と後ろ（プッシュ）に機関車がついていますね。

皆さんの食卓に並ぶタマネギは、もしかしたらこの列車が運んできたタマネギかもしれません。そう思うと、いつもより、ちょっとだけ、人の香りがしませんか？

*表紙裏にカラー写真掲載